

TAKI no TAWAGOTO

【ラ・フォル・ジュルネが金沢で開催】

3年前から東京でも開催されているフランスのナント市発祥の音楽祭「ラ・フォル・ジュルネ」が今年はゴールデンウィーク金沢でも開催されます。

‘ラ・フォル・ジュルネ’とはフランスのナント市で1995年から開催されている世界的に有名な音楽祭で、45分のコンサートを5日間で300公演。それも「一流の演奏を低料金で提供し、明日の音楽を支える聴衆を育てる」というユニークなコンセプトで、2000年はポルトガルのリスボン、2002年にはスペインのビルバオ、2005年には日本の東京と広がってきました。

アーティストック・ディレクターのルネ・マルタン氏は日本での東京に次ぐ開催地を探して大阪や名古屋にも行ったそうですが、最終的に金沢がふさわしいと決定したそうです。そういえば、この音楽祭発祥の地であるナント市の人口が30万人、歴史ある城下町という点や、オーケストラアンサンブル金沢の最近の活躍もマルタン氏のコンセプトにフィットしたのかもしれない。

ふだんクラシックはちょっと苦手という方もせっかくの画期的な世界的な音楽祭ですからぜひ足を運んでみて下さい。

そういうわけで今年のゴールデンウィーク(4月29日～5月5日)は(ラ・フォル・ジュルネ金沢「熱狂の日」音楽祭2008)



テーマ：ベートーベンと仲間たち
会場：石川県立音楽堂、金沢市アートホール、
金沢駅周辺

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/03
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>
〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2008/03
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

弥 生



雛人形のお饅頭 by hama

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

濱のしげさき 『命の根』

最近流行の「コンテンツビジネス」に関わっているとき、ふと思いついたことがある。コンテンツとは、本来は書籍などの目次のことであるが、映画やテレビ番組、ホームページの内容など、今では幅広い。動画が手軽に使えるDVDやホームページの登場、動画カメラの高性能化と低価格化も拍手を掛けて、動画番組の制作現場が広がっている。簡単に動画を編集できるソフトなども安くなり、技術的な敷居はかなりの低くなった。ところが問題は、何をどのように伝えるのかという、ある意味番組の命ともいえるべき根本的な部分である。

画面に映し出される映像や言葉は極めて具体的である。制作を発注する側は、個人的な趣味志向に基づき注文をつけやすい。つまりは、西洋の寓話で言う「ロバと親子」、東洋の格言に言う「船頭多くして船山に登る」状態に陥りやすい。

その時もこのような現場に居合わせていた。注文が多岐にわたり、制作スタッフは対応に追われ、プロジェクトは嵐の航路を往く小船の如しであった。浮かんだままにご紹介したお話は、制作しようとしている番組を「木に例えてみよう」という提案だった。

- ・根：番組の背景・制作の必要性
- ・幹：コンセプト・内容の芯
- ・枝：内容に欠かせない数本の柱

・葉：具体的な表現内容

・樹形：全体の印象・番組のテイスト

人は具体的に目に見えるモノに左右されやすいし、意見も言いやすい。勢い、枝葉に注文が集中し、いつの間にか当初の主旨が忘れられ、太い枝や幹まで捻じ曲げられていく。根があるべき処とは全く異なる場所に、幹から上だけが移動させられることも珍しくない。根の無い状態では木は長持ちせず立ち枯れる。伝えるべき根本が忘れ去られ、番組としての命の根が絶たれたコンテンツは、ただ表面的に面白ければそれで良いという評価にしか耐えられなくなる。

別な比喻では何かの力でじわりと曲がった竹。いつの間にか目指す方向が大きく異なってしまったが、隣り合わせたフシ同士はつながっているため、どこから曲がったか判らない。根本に立ち戻ってみなければ、曲がっていることにさえ気づきにくい。

これは何も番組制作だけでなく、街づくり・地域づくりの現場にも当てはまるのではないかと感じてくる。あるいは、人としての生き方にも。

現場での議論の渦中においても本来の根に立ち返った指摘ができる冷静さ、押し無い芯を持った考え方が、求められていないか。それは情報過多で、判断基準が判りにくくなっている今日、さらに俄か評論家だらけの現状では、至難の業かも知れぬ。

が、最も大切なのは、自分の人生が根からズレていないか見極めることではないか、と思っている。

『多様な構成メンバーの組織を運営するには（その3）』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

前々回、前回と同じテーマについて書いてきた訳ですが、今回は自律する組織を作るための要点についてまとめます。

チームのメンバーが10人ほどいると、全員に対してじっくりと関わることが難しくなります。こういったときは、10人を2グループに分け、それぞれのグループにリーダー的な役割を担うメンバーを作り出します。そしてリーダーを任せられそうなメンバーに対して、個別に話してリーダー役を引き受けてもらうよう要望を出します。

朝のミーティングでは、全員に対する連絡事項などは私から話しますが、昨日の仕事状況や今日の計画などといった情報共有については、グループごとに分かれて話し合ってもらいます。10人全員で話し合うと時間がかかるし、5人以上で行うミーティングだと、必ずお客さんが出てきます。お客さんというのは、一言もしゃべらず、ぼーっとしているメンバーのことです。5人くらいだと、全員が何らかの発言をし、しかも時間は10分程度で終わることが出来ます。

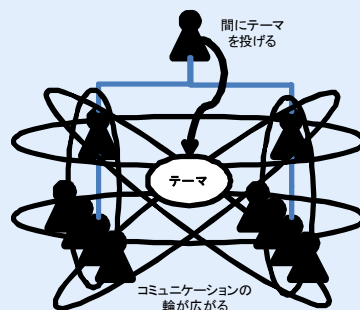
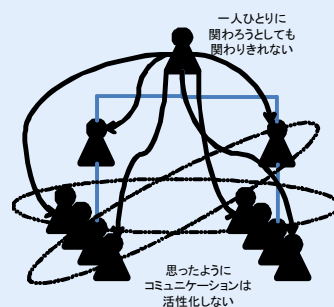
私が一番気にかけていることは、私がない時にチームのメンバーがどういった話題で話しているか、ということです。一番話し合っほしいことは、顧客に対して自らが行った創意工夫についてです。こういったコミュニケーションが、日々の雑談の中で行われていれば、この組織は健全です。しかし、これがなかなか難しい。

一人ひとりに要望したといっても、思ったようなコミュニケーションが起これません。

ポイントは、メンバーとメンバーの間に話し合っほしいテーマを投げることです。

マネージャーとメンバーとの間をマネジメントするのではなく、メンバーとメンバーの間をマネジメントする。

これは別に派遣社員の組織に必要なことではなく、どんな組織でも必要なことではないでしょうか。



『温泉への誘い(60) — 温泉の集中管理 — 』

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

『大きなチカラ～連携から循環～』

かかみがはら

各務原キムチまち都市おこし隊 隊長 星山道弘

岐阜でスーパー銭湯を営んでいます。店内で韓国の「あかすり」^{かかみがはら}サービスを販売している関係もあって、岐阜県各務原市^{まち}が進めている都市おこし「各務原キムチまち都市おこしプロジェクト」にボランティア参加しています。この活動、韓国春川市と姉妹都市提携していることから始まり、ドラマ「冬ソナ」が大人気だった頃は各務原市に数十億円もの経済効果を生んだそうです。私も最初は一応援者だったのですが、その後どういう訳か中心メンバーのリーダーに大抜擢。

^{まち}「都市おこし」・・・各務原市では私も含め誰しも初めての経験。自分の力不足を感じつつ、「都市を良くしたい」という思いを元に15人に方に協力していただきました。その後、様々なイベントに出店したり、市が進めている都市おこし活動の民間委譲の策定をしたり。「都市おこし」という大儀ある一つの目的に集結した私たちはお互いに助け合い、普通なら、不可能とも思えることも成功して進んでいきました。そして「都市」を思うその気持ちは多くの人に波及し、さらに人との出会いを生む。その流れで、私の本業のお手伝いをしていただけることも。「自社内」や「他社」との関係でも解決できなかったことが、地元を愛する強力な「人の繋がり」というエネルギーで解決に向かっていく。「人」を大切に思い、「利益」を理解して、人や地球に良いこと「良心」を、「連携」することで「良い考えの循環」を作り上げる。これってホントに凄いこと。

「良い考えの循環」をもっと自然に考えられるようになれば、きっと世の中は、もっともっと良くなるはず。活動を通じてそんなことを広げていけたら・・・と思います。

今では「都市おこし」を推し進めながら、ボランティアの勇士と「興し」を業務とするLLC（合同会社）を創業することもできました。

こんなにすばらしい活動に参加してくれるメンバーと、支えてくれる人たちに心から感謝です。

『富士の国から』

静岡県県民部文化学術局国民文化祭準備室 溝口 久

昨年の今頃、稲取温泉観光協会事務局長が全国公募、応募者1281名の中から選ばれ、マスコミに追い掛け回されていた。「組織と人間の問題に正面から取り組み、厚い情報の中からしっかりと企画をつくり、関わる人たちとの議論を重ね、万人納得の企画に練り上げ、実行する能力を持つ人。人間的魅力を備え、人との関係をきちんとおさえるエネルギーの持ち主来たれ。」で公募したのが、ニュースは「求める人財」がいつの間にやら「ジリ貧温泉再生、年俸700万円家付き」で阿蘇の野焼きの火ごとく広がっていった。昨年2月7日、書類・面接審査を経て渡邊法子さんに決定、稲取銀水荘でマスコミ発表、翌日、全国紙の朝刊を賑わせた。そろそろ赴任1年が経とうとしている。「何をしたの？稲取はどう変わった？成果は？」と聞かれることがある。そこで彼女が来て、稲取温泉観光協会がやったことを紹介する。

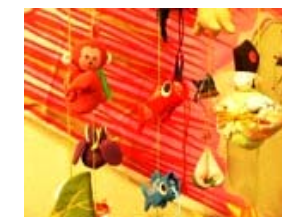
6月：有志ボランティア50人を募って「こらっしえ稲取大作戦」プロジェクト始動 9月：地域密着型旅行会社「稲取温泉観光合同会社」設立 10月：第三種旅行業登録、12月に職員2名で事業開始。今年に入り1月には東京・稲取を結ぶ直行バス運行事業の試行スタート、地域情報フリーペーパー「ウェイラ」創刊(季刊)した。渡邊効果か、2月に国土交通省が「地域再生担い手育成 全国フォーラム」開催し、立て続けに第1回「日本三大つるし飾りサミット」が開かれた。

講演依頼、視察希望も跡を絶たず、10ヶ月で55回の講演会をこなしたという。昼間は人と会い、中での仕事は夜となる。拙者が由布院観光総合事務所の事務局長として勤めた仕事とは濃度が明らかに違う。到底かなわない。

どうぞ、皆さん変わりゆく伊豆稲取の姿を毎年確認にお越しください。



東京直通バス事業スタート



雛のつるし飾り



こらっしえ稲取WSの様子